

哺乳類ノート (3)

—タヌキのけもの道について—

山 口 佳 秀

Notes on Mammals (3)

—On the Moving Track of Raccoon Dog—

Yoshihide YAMAGUCHI

筆者は、神奈川自然誌資料 8 号 (1987) で、秦野市千村地域に生息するホンダタヌキ *Nyctereutes procyonoides viverrinus* (以下タヌキ) が側溝を重要なけもの道として利用していることを報告した。

その後も、タヌキがけもの道として側溝を利用している行動に注目すべきものがあると考えて、1986 年 6 月以来 当調査地 において本種の生態観察を続けている。

最近になって、けもの道としての側溝利用状況が明らかになったので、今後の調査の一資料として報告する。

調査地は秦野市の南西部に位置した千村地域で、約 35ha の範囲である (図 1)。

タヌキが側溝を利用しているか確認する方法として

- ①側溝穴などへの出入状況を観察する。
- ②側溝穴などに付着したタヌキの体毛を発見する。
- ③側溝穴から道路上につけられた足跡を確認する (側溝内には僅かであるが水が流れているため、側溝内から道路に出る場合は足跡が僅かの時間であるが残る図 2-1)。
- ④側溝内につけられた足跡を確認する (側溝底には、ヘドロ状の沈着物あるいは水垢が付いていることが多く、タヌキの足跡は残りやすい。側溝の蓋をはがして足跡の有無、進行方向を確認した 図 2-2)。
- ⑤住民からの聞きとり。

以上の方法を用いて、タヌキの側溝利用の状況を調査した。

観察時間はタヌキが日没と日の出近くに二度の活動ピークを示す夜行性動物という習性を考えて、4:30

～7:00, 17:30～20:00 の時間帯に重点をおいた。

筆者は 1986 年 6 月以来、毎朝のように 5:00～6:30 の間の約 1 時間飼犬 (柴犬雑種) と散歩をしているが、その時の観察が多い。

また、手作りのブラインドを用いて使用頻度の高い側溝口で観察した。

タヌキの観察と側溝の利用状況

タヌキの側溝利用の状況を図 1 に示した。

1 日に複数回利用されている側溝は実線で示し、毎日ではないが、時々利用されている側溝は点線で示してある。また、フィールドにつけられたけもの道は細線で表わしてある。

調査地には 9 個体のタヌキが生息しており、このタヌキたちの側溝利用において調査地内を 3 行動域に分けることができたので、その区域を 1～3 で示した。

1. 行動域 1986 年 6 月 16 日に初めて側溝穴 (図 1-A) に逃げこむタヌキを目撃して以来、この地域でのタヌキの目撃は数十回になるが 1987 年 11 月 1 日の観察は次の通りであった。

観察位置は側溝穴より道路をはさんだ西側約 8 m 離れた所に設けたブラインドの中、観察時間 4:30～6:00。

④ 4:30 現場到着、筆者の気配で U ターンして側溝穴に逃げ込む—— 4:50 側溝穴より出て、西側のクリ、クヌギ林に向う—— 5:05 同じ位置から現れ、道路を渡り側溝内に戻る—— 5:30 側溝穴より出て再び雑木林に向う。

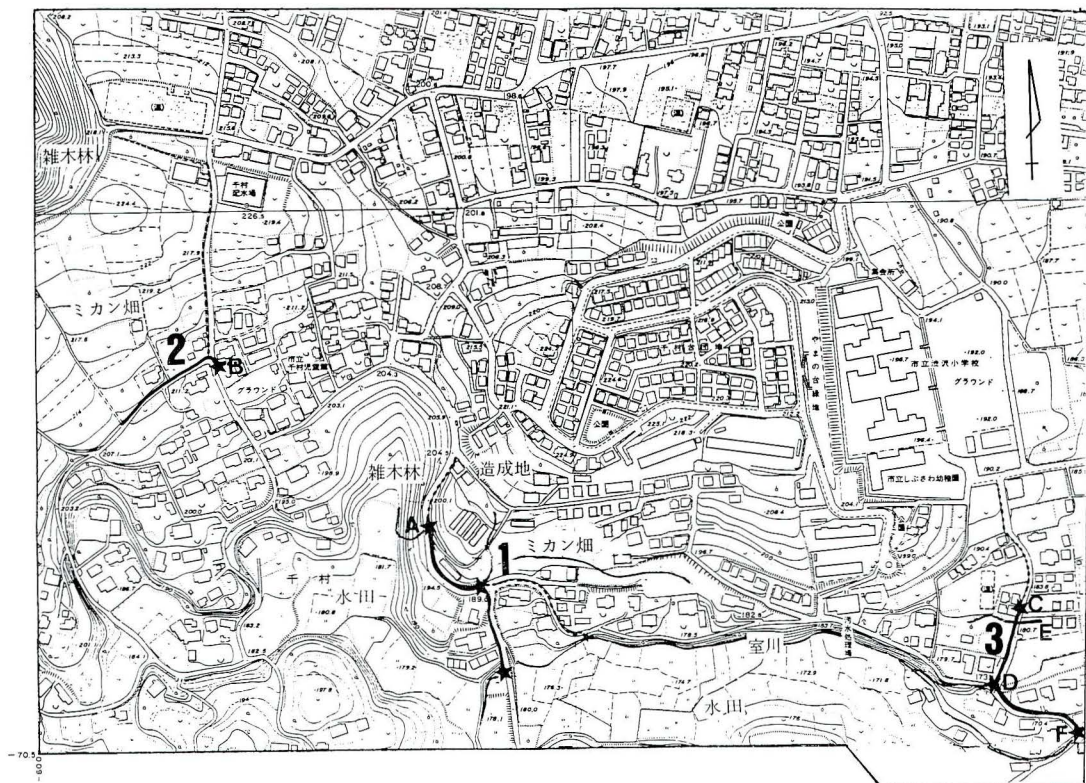


図1 調査地

⑤5:00 側溝穴から顔を出して周囲の様子をうかがっている(図2-4)——5:31 様子をうかがいながら側溝穴から出るが、道路を横断せずに東側のコノテガシワの植込を通してミカン畑に向う。筆者の存在を気にしているように思われた。

⑥5:01 筆者から約2 mほど離れた雑木松側の道端に1番と2仔の1家族のタヌキが現れる。雄か雌親か不明であるが1個体、注意深く道路を横断し、側溝穴に入る。続くように残った親が渡り、側溝穴に入る。数秒後、仔タヌキは2個体が並んで道路を横断、側溝穴付近で立ち止まっていたが、車のライトに驚いて側溝内に逃げ込む。——5:45 側溝より出て、西側雑木松に向うため道路を横断中、散歩の犬と人間に気付いたのか慌てて、道路上から飛び込むようにして雑木林内に消えるタヌキを目撃する。

このように1.行動域は、西側斜面に広がるクリ、コナラ林に生活の中心を置いている1家族4個体のタヌキと東側の住宅地と造成地の間に残されたミカン畑や農家の屋敷を囲む竹林に生活の中心を置く2個体のタ

ヌキが約150 mの側溝を互いの行動域を継ぐ通路として利用している。また、両個体とも南側の室川に沿った水田に向う場合は、約200 mの側溝を共同の通路として利用している。

2.行動域 1987年7月17日 5:30頃(図1-B)地点において側溝より路上に出てきたところ、筆者の気配でUターンして再び側溝内に逃げ込むタヌキを目撃した。その後、数回の目撃と溝底につけられた足跡などから推察すると、西側に広がる耕作地(みかん畑とトウモロコシ、カボチャなど季節の野菜を栽培)に生活の中心を置く1個体のタヌキが側溝口の近くにあるゴミ置場に出される生ゴミや残飯を求めて約180 mの側溝を利用しているように思われた。

3.行動域 1987年7月2日 5:40頃(図1-C, 図2-3)地点において、生活排水を側溝にたれ流すために側溝の蓋を一枚取りはずした穴に逃げこむタヌキを目撃した。その後、何回となくタヌキを目撃したり、この場所での観察を試みているが、10月9日の観察は次の通りであった。

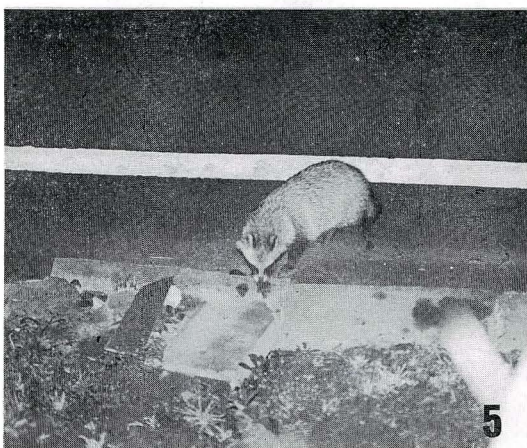
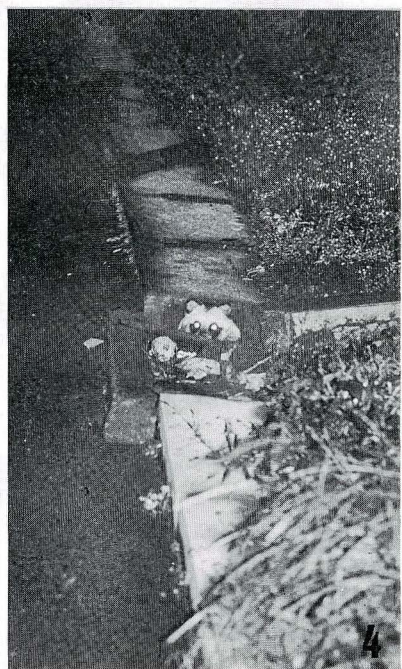
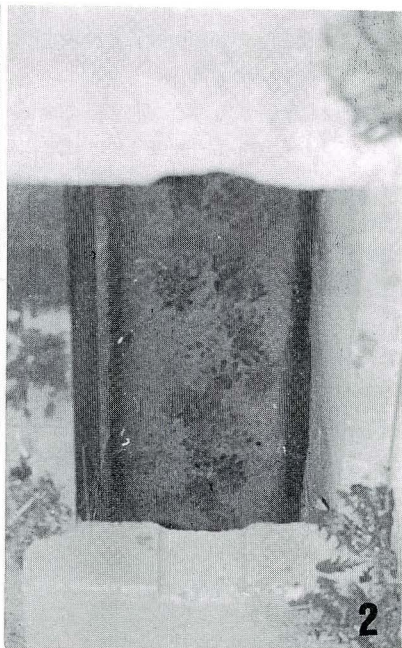
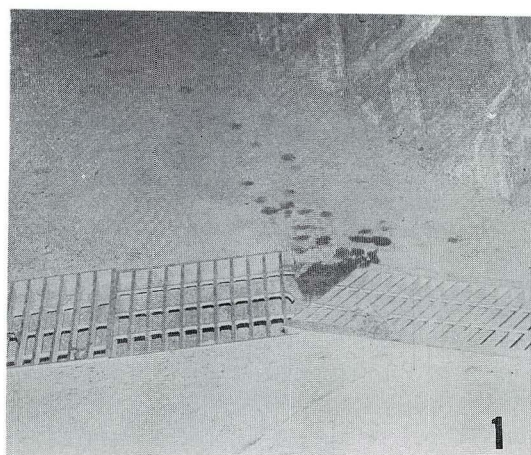


図2 1 道路に残されたタヌキの足跡 (D地点)
 2 側溝底に残されたタヌキの足跡 (C地点付近)
 3 C地点の側溝穴 (矢印) とその環境
 4 A地点の側溝穴より顔を出すタヌキ
 5 A地点の側溝穴に入ろうとするタヌキ

観察位置は側溝穴より道路をはさんだ東側約15m離れた造成地の植込の中、観察時間17:00~19:30。

①18:25 側溝穴から顔だけ出して外部の様子を見ていたが、側溝内に消えてしまう（この時間帯1~2分毎に車、バイクなど通る）——18:35 側溝穴から顔だけ出して様子を見たのち、前肢を側溝縁にかけ、身を乗り出しながら周囲の様子を見ているが車のライトで再び側溝内に消る——19:05（図1-D）地点の隙間から出たという情報を得る。

②18:50 住宅地間に残る耕作地（サトイモなど栽培）からタヌキ現れる。道路端に立ち止り、車や人の往来の様子をうかがいながら側溝穴に近づく。再び立ち止り、周囲の様子を見たのち側溝内に消える。——19:05 側溝穴より150mほど離れた地点（図1-D）の側溝蓋の隙間から2個体のタヌキが出て道路を横断し竹林に向ったという情報を得る——19:10 側溝蓋の隙間付近の舗装道路には、2個体のタヌキの濡れた足跡が点々と竹林方向についていた（図2-1）。

このように3.行動域においては、室川に沿った竹林に生活の中心を置く1個体のタヌキと（図1-E）地点の排水管内（10年ほど前に造成されたが、今だに建築されないため排水管は使われていない）を寝ぐらあるいは隠れ家にして、住宅地の間に残る耕作地を生活の中心としているタヌキの2個体が生息している。このタヌキたちはC地点の側溝穴と室川に排水を放流するために設けられた放水口（図1-F）までの約350mの側溝を互いの行動域を結ぶ通路として利用し、耕作で栽培されているトウモロコシや生活排水に含まれる残飯などを求めて往来している。

通常の室川の水位は10mにも達しないためタヌキたちは放水口を出入口として利用しているが、降雨によって水位が増した場合は側溝の途中にあるU字溝の鉄製の蓋とコンクリート蓋の継ぎ目（図1-D）が出入口として利用される。

また、調査中に側溝内を移動中のタヌキが飼犬によって通常の通り道以外に追われてしまう行動が観察された。

筆者は、犬と散歩を始めてまもなく、飼犬が側溝の蓋にある隙間に鼻先を向けていかにも餌物を追い求めているような行動をするのを度々目撃した。その後、散歩中に知り合った数人の飼主からも個々の飼犬が同様の行動をとるということを知り、そのなかの1人かぶこの行為はタヌキを追っているのだという情報を得た。

そこで側溝穴に入ったタヌキを目撃した直後に意識的に犬を近づけたところ、犬は鼻先を隙間に近づける同様の行動を始めた。注意して側溝内のタヌキを観察したところ、通常は南下して室川に移動するのであるが、逆方向に逃げ去る様子もなく、時々立ち止まりながら、犬の位置より側溝蓋2個分先を犬の歩速に合わせるように移動していた。

この時は200mほどの追跡で中止したが、飼犬の散歩コースによっては通常のけもの道から相当離れた場所まで追われてしまうのではないかと思われた。タヌキの日周行動は活動のピークが日没と日の出ごろにあるために、朝、夕の飼犬の散歩する時間帯と重なることが多く、通常のけもの道以外の側溝に追われるタヌキは相当数いると思われる。

考 察

① 調査地には9個体のタヌキが生息し、3カ所の側溝で約880mが1日複数回利用される重要なけもの道であった。

調査地の環境は、市道827号線をはさんで北側渋沢駅方面は近年の土地開発によって宅地化が進み、人口増加は著しい。一方、渋沢丘陵側は市街化調整区域に指定され、今だ田園風景を多く残した地域で、室川に沿った低地は水田が発達し、アカガエル、イモリ、タニシ、ドジョウなど豊富に生息し、タヌキにとっては絶好の餌場と考えられる。

だが、室川沿いの竹林やクリ、コナラ林に生活の中心を置くタヌキ6個体は、生活排水に含まれる残飯やゴミ置場の生ゴミ（ビニール袋に入った生ゴミは野良ネコによって袋が破られ、ネコが食べ散らかした残りをタヌキが食べている）や住宅地内に残る耕作地で栽培されるトウモロコシなどの野菜を求めて、我々の生活域まで侵入してきており、この都市環境と自然環境を結ぶ通路として側溝が重要な役割をはたしていた。

② 急激に増加したタヌキの輪禍とその要因についての推考。

1987年11月10日 神奈川新聞のサイドミラーに「お巡さん、ひき逃です！」何ともぶっそうな記事が載っていた。麻生区万福寺の県道でタヌキが車にはねられ、頭や足に打撲傷をおい区内の獣医さんに預けられたという内容である。

この様な交通事故にあったタヌキのニュースは、ここ数年で10件以上あったと思われる。

金井（1987）によると、東京都では1971年までは交

通事故の報告は0件であったものが、1976年に5件、1981年も5件、1986年になると31件になり、1981年以降タヌキの交通事故は急増しているという。

土岐(1987. 6. 28 私信)によると、横須賀市を中心に調査し、1986年に37頭、1987年は6月までに15頭(うち1頭は電車による)が交通事故によって死亡しているという。被害は緑の比較的多い横須賀市の逸見や池上周辺に集中している。意外なのは浦郷や三笠通り、三春町あたりにのぎやかな市街地でも事故にあっていうという。

また、飯村(1986)は、1979年までは県下でせいぜい2〜3件の報告であったが、1980年以降著しく多くなり、1982年71頭、1983年37頭が交通事故にあったという。交通事故の原因として、神奈川県は首都圏の中枢に位置して道路が整備され、当然幹線、支線を通じて自動車の交通量が多くなっている。加えて新設の道路は自然環境を分断して貫通することが多く、このためタヌキはある生息地から他の場所に移住する場合、道路を横断することになるが、この時、自動車に衝突され死亡すると報告している。

だが、東京都においても1980年以降、なぜタヌキの輪禍が急増したのか、また、浦郷、三笠通りなど市街地での事故が多いという事実を考えた時、限りなく進む車社会と新設道路によるハビタットの分断が原因という論調は、当たってはいるのだろうが、もう一つのを得ていないように思われた。

そこで筆者は、何か別の要因も加わっているのではないかという疑問をいだき、最近交通事故があったという情報を得た横須賀市上町、川崎市麻生区王禅寺1896、同区石福寺県道世田谷・町田線、伊勢原市下粕屋国道246号線、秦野市曲松国道246号線などの現場とその周辺を調査した。また、池田(1979)が、九州高島におけるタヌキの行動圏を調査し、1個体あたり1.14から4.28haで、平均2.79haであったというデータをもとに、筆者の調査中に得た県内の横浜市区黒須田町、川崎市宮前区神木本町、鎌倉市大町など各地で側溝を利用するタヌキがいるという情報等も併せて、タヌキが事故にあうまでの過程を推考してみた。

側溝や下水管内を移動中のタヌキは、何らかの要因(最も多いと思われる行為は飼犬の散歩、野犬など)によって通常のけもの道以外に追いやられてしまう。縦横に、やや大袈裟に表現すると碁盤の目状に配置された側溝やU字溝、下水管などの迷路に迷い込んでしまったタヌキは、やっと見つけた隙間や排水口から這

出たところが車の往來の激しい交差点近くであったり繁華街で、不幸にも自動車に衝突されてしまうのではないだろうか。適応力の強いタヌキは、土地開発によって減少する野生哺乳類の生息域をただ手をこまねいているだけでなく、側溝あるいは都市環境もタヌキの生活を支えるハビタットとして積極的に取り込んだことが、1980年代から急激に増加したタヌキの輪禍の一つの要因と考えた方が的を得ているのではないだろうか。

おわりに

稿を終えるにあたり、タヌキの輪禍に関する情報を心よく提供していただいた横須賀市上町 土岐政一獣医師、川崎市青少年科学館 木下あけみ学芸員に心より御礼申し上げる。

また、交通事故によって死亡するタヌキも心配であるがそれ以上に気掛りな問題がある。

最近、あるテレビ番組の中で鎌倉の一軒の庭先にタヌキ一家が毎夜出没し、平然と与えられた餌を食べていた。中には大胆な仔タヌキがいて人の手からパンやハムをもらっている様子が画面に写し出されていた。

このように都市のなかでもタヌキを見たという話はしばしばマスコミに取り上げられている。

現況下にあっては、ペットのようにタヌキと接している人々でも、極く近い将来の問題として生活排水のたれ流しされている側溝、下水管をけもの道として利用しているタヌキを汚染、不潔など衛生上の理由からドブネズミならぬ“ドブタヌキ”と呼ぶようになって、昔から人々とかかわり合いの深かったタヌキが反対に嫌われ者の代表となってしまうような事態だけは避けたいものである。筆者1人の取越苦労であってほしいものだ。

文 献

- 飯村 武, 1986. 神奈川県におけるホンダタヌキの生態に関する調査. 神奈川県立自然保護センター調査研究報告, (3): 1-12.
- 池田 啓, 1979. 高島におけるホンダタヌキの行動圏利用について. 日本生態学会誌, 29: 35-48.
- 池田 啓, 1987. タヌキが街にやってきた. 自然保護, (305): 8-9.
- 金井郁夫, 1987. 東京の哺乳類現況(講演要旨). 哺乳類科学, (27) 1-2: 65.
- 土岐政一, 1986. 子タヌキ元気に古巣へ. 横須賀動物

愛護会会報, (16) : 1-2.

山口佳秀, 1987. 哺乳類ノート(2) 側溝をけもの道
として利用するタヌキについて. 神奈川自然

誌資料, (8) : 71~74.

(神奈川県立博物館)